

多自然川づくり取り組み事例

タイトル : 岩木川の河道掘削事業における環境への配慮		
水系/河川名 : 岩木川水系岩木川	河川分類 : 大河川	
河川の流域面積 : 2540	整備計画流量 : 2500m ³ /s	セグメント : 2-2
事業 : 河川改修	事業開始年度 : 令和4年度	
目標設定 : 定量的	段階 : D(実施・施工時)	
課題・目的(主な) : 流下能力の確保、外来種対策		
工法(主な) : 掘削(高水敷)		
配慮事項(主な) : その他		

背景・課題、目標設定

<背景>

R4年8月の出水被害を受け、「岩木川緊急治水プロジェクト」を策定し、総量50万m³に及ぶ河道掘削を実施しているところ。

河道掘削の実施にあたっては、河道内樹木の再繁茂、再堆積を防ぐことを主眼に複数ケースの掘削を試行してきたところであるが、今般、再繁茂、再堆積対策として有効と思われる見解があったことから、その内容を発表するものである。

併せて、これまでは「なるべく環境に影響が少なくなるように」検討されてきた河道掘削であるが、「新たな河川環境の創出」という視点で、河川環境を評価できないか、岩木川の例を基に提案したい。

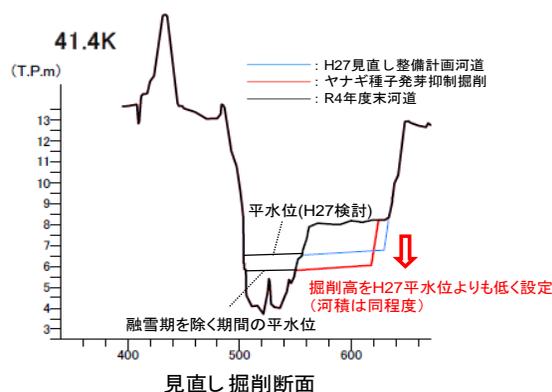
<課題>

- ・河道掘削箇所の再繁茂・再堆積対策
- ・河道掘削による環境への影響をどう評価するか(あらたな評価方法の提案)

取り組み内容・対策例(1/2)

河道掘削高を複数設定し、再繁茂・再堆積状況をモニタリング

- ・ケース1: 平水位以上
- ・ケース2: 平水位
- ・ケース3: 融雪期を除いた平水位



取り組み内容・対策例(2/2)

河川環境管理シートを用いて、掘削後の断面で評価を実施

◆生息場の多様性の評価値の変化

距離標(空間単位:1km)		標19	標20	標21	標22	標23	標24	標25	標26	標27	標28	標29	標30	標31	標32	標33	標34	標35	標36	標37	標38	標39	標40	標41	標42	標43	標44	標45	標46	
2時期の評価の比較	1.低・中萆草地	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
	2.河辺性の樹林・河畔林	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	3.自然裸地	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
	4.外来植物	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	5.水生植物帯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	6.水際自然度	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	7.水際の複雑さ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	8.連続する灘溜	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	9.ワンド・たまり						○	○					○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
	10.湛水域																													
	11.干潟	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	12.ヨシ原	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
生息場の多様性の評価値の比較	R2(現況・基準年)	3	1	2	4	3	5	2	2	1	3	4	1	3	1	4	2	2	2	1	2	3	4	4	3	5	3	5	4	
	R5(掘削後・自然裸地)	3	1	2	5	3	4	2	2	2	3	5	2	3	2	4	3	2	3	1	2	3	2	3	3	3	4	5	4	
	評価値の差(R5-R2)	0	0	0	1	0	-1	0	0	1	0	1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	-2	-1	0	-2	1	0	0	

- ・ 河道掘削による環境配慮について、河川環境管理シートにより評価した。
- ・ 河道掘削後に評価値が高くなることが確認された。

モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針

<今後の対応>

- ・モニタリングを継続し、再繁茂・再堆積状況を把握。

<アピールポイント>

これまで「なるべく環境に影響が少なくなるように」検討されてきた河道掘削であるが、「新たな河川環境の創出」という視点で、河川環境を評価できるのではないかと。

今後の「河川環境目標の定量化」への一手法として活用できるのではないかと。

備考